

「お化け屋敷に入っても涼しくはなりません。むしろ汗をかいて出てくる人が多い」と話す五味弘文氏—東京・高円寺の事務所



原点に戻るお化け屋敷

夏といえばお化け屋敷。最近では映像や音響効果を駆使した機械仕掛けのものより、キャスト（役者）の熟練の技を重視したアナログな脅かし方が主流になりつつある。昔のような古い木造校舎やいかにも出そうな墓地が減ってきた中、現代ならではの恐怖感をあおる新しい舞台設定を模索する動きも出てきた。

「脅かし役」の技重視

機械に頼らず恐怖演出

お化け屋敷が遊園地の中でも日陰の存在だった時代があった。「お化け屋敷になぜ人は並ぶのか」(角川書店)の著者で、全国各地のお化け屋敷を制作・演出している五味弘文氏は「20年ほど前までは人件費の掛からない機械仕掛けのものも多く、大人が真剣に楽しめない子どもたましの施設ばかりだった」と振り返る。変わり始めたのは1990年代後半から。「私たちが新しいトレンドをつくったと自負している」と話すのは、富士急ハイランド(山梨県)を運営する富士急行の早川次郎営業推進室係長。同遊園地は99年に本格的にお化け屋敷を始めるに当たり、全国のお化け屋敷を視察して研究。たどり着いたのが、機械に頼らず、訓練を積んだお化け役キャストたちが一人一人の客の様子を見ながら脅かし

近年のお化け屋敷は人を使って脅かすという原点に戻りつつある。山梨県・富士急ハイランドの「最恐怖棟(せんりつ)迷宮」

方を変える、極めてアナログな手法だったという。五味氏も「お化け屋敷にはキャストとお客さまがコミュニケーションを楽しむ側面がある」と指摘。「お客さまはみんな違う歩き方、違う意識で入ってくる。キャストはその様子を見ながら、瞬間的にどうやって脅かせばいいか判断しながらやっている。人間対人間のコミュニケーションが本質なんです」



舞台設定も変わりつつある。定番だった霊園や学校の校舎などは近代的な設備になり、恐怖感をかき立てる舞台ではなくなってきた。そこで最近お化け屋敷の舞台に設定されることが増えてきたのが「家の中」。近隣関係が疎遠になり、隣に誰が住んでいるか知らないことも多い。今、お化けが出そうな暗闇が都会から姿を消しつつある現代において、「隣の家は都会の中で最後に残った闇の部分だ」と思う(五味氏)。

昨夏は東日本大震災に伴う自粛ムードもあり、お化け屋敷は低調で、「予定していたイベントが軒並みなくなつた」と五味氏は話す。この夏こそ、創意工夫を凝らして私たちが怖がらせてくれる手だれのお化け役者たちとコミュニケーションを楽しむのもいいかもしれない。

(2012年8月17日 22面)

☆みなさんはどんなお化け屋敷が1番怖いですか？ またこれまでに聞いた怖い話を互いに教え合ってみよう。